

# 月刊 地域支え合い情報

東日本大震災の被災者の生活を支援するあなたのための情報紙です。



仮設住宅に招かれて住民と語らうひととき (石巻復興きずな新聞舎)

## 特集

## 伝えることは、つながること

- 「心を込めた手紙」をあなたへ  
——仮設住宅全戸に、新聞を届ける ③  
石巻復興きずな新聞舎 (宮城県石巻市)
- まちのオモイデでつなぐ心の交流 ⑤  
3.11 オモイデツアー (宮城県仙台市若林区)
- 子どもの視点から体験を話す、  
10代の語り部たち ⑦  
TSUNAGU Teenager Tourguide (宮城県東松島市)

### ☆専門家に聞く地域づくりのヒント

(阪神・淡路大震災記念 人と防災未来センター 主任研究員 菅野拓さん)

### 場の力 ⑨

手づくり食品研究会 (福島県郡山市)

### まじわる災害公営住宅 ⑩

仙台市若林西市営住宅 (宮城県仙台市若林区)

### 東北の元気 ⑪

一般社団法人 復興みなさん会 (宮城県南三陸町)

### どこでもサロン ⑫

おねえさんクラブ (福島県猪苗代町)  
東山歩こう会 (福島県川内村)

### 被災地の今 ◆ 2014年8月 広島土砂災害から ⑭

社会福祉法人広島市安佐南区社会福祉協議会 主任 石田浩巳さん

### 宮城県サポートセンター支援事務所からのお知らせ ⑮

### 場の力 ⑯

AA (宮城県石巻市)



特集

# 伝えることは



東日本大震災によって体験したこと。

それまで地域で営まれていた暮らしのこと。

いま自分たちの身の回りで起きていること。

被災した地域や人について、記録し、語り継ぎ、広く知らせる。

情報それぞれに、さまざまなメッセージが込められています。

見聞きするときはもちろんですが、地域のことや自分と向き合いながら

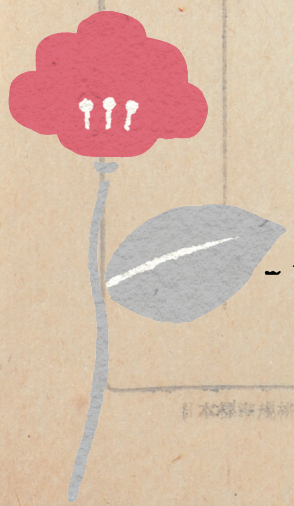
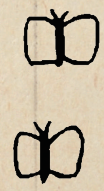
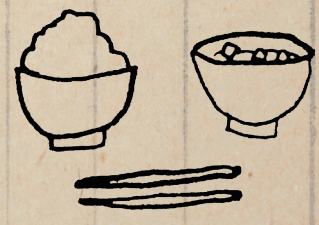
発信に取り組むなかでも、新しいことを学んだり、

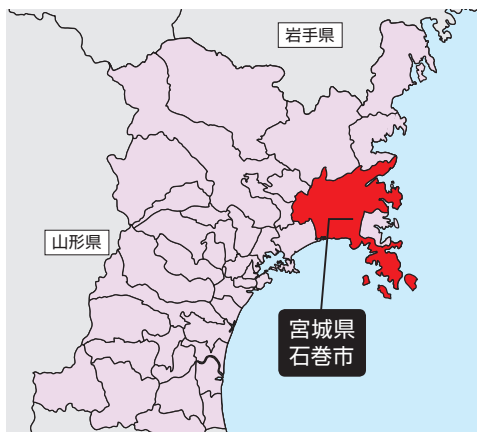
日々の過ごし方が活性化されたりします。

何かを伝え、何かを受け取ることをきっかけに、

互いに気持ちを通わせ、分かち合う、

あたたかいつながりが生まれます。





配達先の仮設住宅で、住民と

DATA

石巻復興きずな新聞舎

〒986-0813 宮城県石巻市駅前北通り1-5-3  
 TEL 090-6686-8317  
 FAX 050-3488-1702  
 URL <http://www.kizuna-shinbun.org/>  
 E-mail [kasetsukizuna@gmail.com](mailto:kasetsukizuna@gmail.com)

# 「心を込めた手紙」をあなたへ ——仮設住宅全戸に、新聞を届ける

石巻復興きずな新聞舎（宮城県石巻市）

ポイント

- 手づくりの新聞をとおして、仮設暮らしに役立つ情報や石巻市のいまを発信している
- 石巻市内の仮設住宅全戸を回って新聞を手渡しすることで、住民の声に耳を傾け、心に寄り添う

「こんにちは！きずな新聞をお届けにきました！」

仮設住宅に、明るく爽やかな声が通り抜けていく。顔を出した住民は、配達者の姿を目にして笑みを浮かべる。新聞を受け取ると、「楽しみにしていたんだよ。いつもありがとうね」と応じる。「寒くなってきましたね。今回インフルエンザ予防の記事が載っているので、この手洗い方法、試してみてくださいね」。紙面の話題をきっかけに話は広がっていく。

日頃の生活のことから、震災当時のこと、将来不安に感じていることなど。近所や家族には話しづらくても、配達に訪れた人とだと気兼ねなく話せることもある。

配達者のピブスには、「石巻復興きずな新聞」と描かれたロゴが刻まれている。この新聞は、石巻市内の全応急仮設住宅と市街地の復興公営住宅に毎月無料で配付されていて、延べ1800人の配達ボランティアが携わって今日まで続けられてきた。

手渡す言葉、受容する言葉

1242戸1156世帯

2489人。石巻市の応急仮設住宅の現在の戸数と世帯数、入居人数である（2017年11月時点）。復興公営住宅や防災集団移転団地が完成していなかったり、復興公営住宅の入居条件から外れてしまったり、移住先を決めかねていたり、さまざまな事情から、いまでもそれだけの人が仮設生活を続けている。

「周りの人たちの移転が進むなかで、取り残されたような気持ちを感じている住民さんも多い。不安やあせり、寂しさの声を傾けて、お話しすることで少しでも心が軽くなっていただけたら」と話すのは、新聞の編集長の岩元暁子さんだ。そうした思いから、仮設住宅全戸での手渡しの配達にこだわり、一人ひとりに寄り添っている。困りごとがあれば、医療職や行政とのつなぎ役にもなる。新聞は、「住民さんとお会いしてお話をするためのきっかけ」（岩元さん）だという。

石巻復興きずな新聞は、一般社団法人ピースボート災害ボランティアセンター（以下PBV）が11年10月か



## 石巻復興きずな新聞舎 岩元 暁子さん(右端)

「記事を書く人、新聞を印刷する人、新聞を配布する人。多くのボランティアの手によって活動が成り立っています。最後のひとりが仮設住宅を出る、その日まで活動を続けるために、ボランティアさんのやりがいもたいせつにしています」

ら16年3月まで発行していた仮設きずな新聞の後継紙だ。「仮設暮らしに役立つ情報を発信する新聞」「ココロが元気になる新聞」をコンセプトにした同紙は、震災から丸5年を節目に廃刊が決まる。当時の編集長でもあった岩元さんは、そのときの心境をこう語る。「終刊を決めた際には、複雑な思いがありました。『仮設住宅に暮らす方々にとって、震災5年は何の節目でもない。仮設住宅を出て、次の住まいに移る、その時こそが節目となるはず』。そうした中、新聞の制作や配布に携わって来ていたボランティアたちから『続けたい』という声が上がりました。『関わるボランティアにとっても生き甲斐になるなら』。私はこの活動を続けていける『新しいカタチ』を模索し始めました」(石巻復興きずな新聞創刊号より)。そうした経緯から、岩元さんはPBVを退職し、16年4月に任意団体「石巻復興きずな新聞舎」を設立して新たな新聞を創刊させた。新聞は、愛されてきた旧紙の紙面を活かしながら、「いま」の石巻

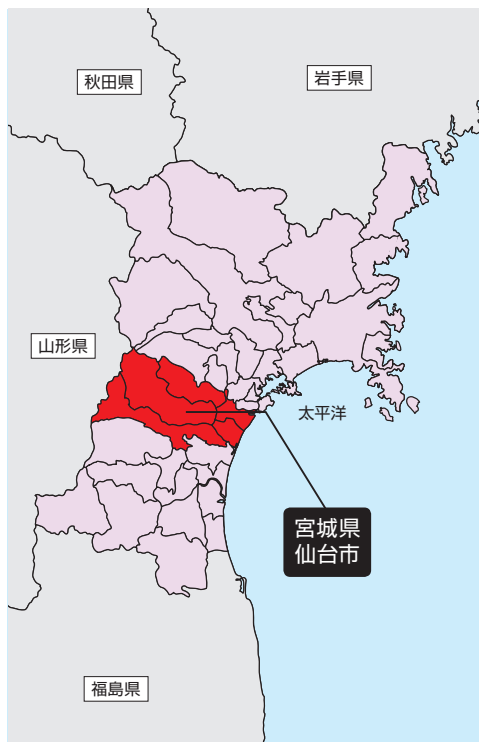
に必要な情報を伝えている。原稿は、岩元さんたち数人のスタッフが担当するほか、医療・健康、心のケア、防災・減災などの専門家や、まちづくり・地域づくりにかかる住民にも依頼している。A4判4頁の新聞の1面には、復興に向けた取り組みや時事性の高い内容が写真とともに掲載されていて、見る人の目を引く。「自分も参加してみたい」と読んで人が感じて行動につながるように、書きかたが工夫されている。2〜4面は連載記事が中心で、仮設住宅に高齢者が多いことから医療・健康の記事を、住民が市街地に興味をもてるようにまちづくりの記事を、と住民のニーズを基に構成されている。執筆のポイントは、「なるべく主観を入れること」。客観的に描写する一般の新聞に比べて、臨場感があり、書き手の体温が感じられる記事になっている。

編集作業には、岩元さんと夫で副代表の川口穰さんとで、発行の前月末から一週間かけて取り組む。配達には、県内外のボランティアとともに、担当エリア制を敷いており、配達を機に、普段から配達先のことを気にかける人や、地域とのつながりの大事さを認識して自治会に参加する人も出てきた。他県から市職員に派遣され、配達にも携わる加藤友英さんは、「県外から入って、何をしたいのかかわからない人たちも、こうした受け皿があることで活動できる」とその意義を語る。

### 復興とは

ボランティアのオリエンテーション時に配られる冊子の巻末には、「復興とは」と書かれていて、その後ろが空欄になっている。きつと向き合う人の数だけ書き込む答えはあるだろう。岩元さんは、一例として阪神・淡路大震災後に行われた調査(兵庫県「生活復興調査報告書(2005年度)」)を引用し、「被災者が生活復興を実感できた要素のひとつに、重要他者(たいせつだと思える人)との出会いがあった」と説明する。「常日頃一緒にいなくても、電話や手紙でも遠くから思ってくれている人がいると感じられれば、その人にとっての重要他者になるかもしれない」。そんな願いも込めて、きずな新聞を「心を込めた手紙」にたとえる。心を込めて書かれた手紙と、それを手渡す人の姿は、住民の確かな力になっている。ボランティアの一人は、こう口にする。「きずな新聞の名前を出す、住民の表情が明るく変わるんです。積み重ねてきたものの重みを感じる」。発行当時から新聞をたいせつに保管していて「わたしの宝物」と呼んでいる住民もいるという。

新聞の一つのゴールは「最後のひとりが仮設住宅を出る日」だ。けれど、「必要」「続けたい」という声があれば、継続も考えたという。「どのような形になっても、きずな新聞の精神がこのまちに残ってくれたらうれしい」。岩元さんは先を見据える。「それは、見守りのたいせつさもいれないし、情報発信をすることで世のながが変わるといふ気づきかもしれない」。田



蒲生にも、震災後市営バスが初乗り入れ（2017年9月24日）

## まちのオモイデでつなぐ心の交流

◎ 3.11 オモイデツアー（宮城県仙台市）

ライター：熊谷智美

### ポイント

- 被災地域を巡るツアーは、アーカイブを活用して、地域の人々の記憶を蘇らせ、思い出を共有する
- ツアーを通じて、参加者と地元住民が交流。さらに、被災地域同士の交流や、地域で活動する団体・個人との交流も醸成されて、さまざまなつながりを生んでいる

2016年12月11日、津波で大きな被害を受けた仙台市若林区の荒浜を目指して5年9か月ぶりに仙台市営バスが走った。一日限りの市営バスの運行は、荒浜に住んでいた人たちを乗せて仙台駅を出発し、かつてのルートを辿って深沼海水浴場へ。震災以前、市営バスは荒浜の住民にとって生活の足であり、夏には仙台市内唯一の海水浴場へ向かう人たちの交通手段でもあった。

### 思い出が人をつなぐ

市営バスの運行は「3.11オモイデツアー」の二環で行われた。オモイデツアーは13年度から4年間にわたって、仙台市の震災メモリアル協働プロジェクトの一環でNPO法人20世紀アーカイブ仙台と市との協働事業として実施されてきた。当初は仙台市内の沿岸被災地である蒲生、荒浜、名取市閑上地区を一日で巡るものだった。しかし、ある参加者から「各地域の違いがわからない」と言われたこともあって、内容が再検討された。

そしてそれまでのルートツ

アーではなく、海岸の清掃を行ったり、地元のお母さんたちがつくるおまかない（食事）をいただくなど、その地区に住んでいた人たちとの交流の時間を多くもてる滞在型のツアーに変更した。

思い出を引き出すのは、地域アーカイブとして集められた震災前の映像や写真。震災前の風景を見て、そこに住んでいた人たちがすぎた日々を語る。このツアーは被害状況を視察するのではなく、思い出を共有することで、地元の住民と訪れる人を結ぶことを目的としている。そして、荒浜や蒲生のファンを増やしたいというのがスタッフの願うところだ。



昭和時代のなつかしい写真を見ながら思い出を語り合う「オモイデを語る会」（2016年12月11日）

### 3.11 オモイデアーカイブ

代表 佐藤 正実さん

「体験していない人にも“自分事”にしてもらうために、アーカイブを利活用する」



#### スタッフの提案が

#### ツアーに反映

オモイデツアーのスタッフは現在約40人。一度でもツアーに参加した人はスタッフになる資格があり、宮城県外在住のスタッフもいる。得意な分野がある人はそれを發揮するほか、はじめて参加する人がとけこみやすい場づくりをするなど、自らが楽しく参加することがスタッフの役割のようだ。

スタッフが企画を提案することも多い。貞山堀にボートやサップ（パドルボートの一種）を持ちこんで、「堀とまちをつなげてみよう」という企画を実施したり、新浜と荒浜をノルディックウォーキングで歩く活動もあった。仙



スタッフ提案による貞山堀でまちをつなぐ企画（2017年9月9日）

台市天文台の移動天文車へガ号を荒浜に呼び、夜の天体観測をしたこともある。

#### 新たな交流を醸成

このツアーは主催団体やスタッフだけでなく、各地域で活動する「荒浜再生を願う会」、「蒲生まちづくりの会」、「高砂市民センター」、「中野ふるさとYAMA学校」のほか、偽バス停制作者の佐竹真紀子さんなど複数の団体や個人の協力もあり、さまざまなつながりを生んでいる。それまであまり交流のなかった荒浜と蒲生の人たちとの交流の機会も生み出した。

市営バスが荒浜に向かった日、終点では蒲生の人たちが食事の準備をしてバスの到着を待っていた。バスが近づくと「おかえりなさい」「ようこそ」の横断幕などを掲げて、地元荒浜の人たちを歓迎した。

17年9月、今度は蒲生の人たちに市営バスツアーを体験してもらおうと、荒浜の人たちが蒲生で市営バスを出迎えた。オモイデツアーは被災地を知らなかった人たちが荒浜



震災後にはじめて市営バスが深沼海水浴場前(荒浜)まで通った（2016年12月11日/平野卓也さん撮影）

や蒲生に連れてきただけでなく、近隣被災地の人たちとのつながりも深めている。

#### 活動の継続に向けて

市との協働事業から離れた今年度は、クラウドファンディングによって活動資金を得た。活動を継続させるために資金などの課題はある。それでも3・11オモイデアーカイブ代表の佐藤正実さんは、「東京オリンピックが開催される2020年には荒浜、蒲生の人たちが参加する復刻版運動会を開催したいと思っています」と先を見据えている。オモイデツアーで昔の写真を見ながら語り合う時、きまつて盛りあがるのが運動会の話題なのだという。

思い出は過去と現在を結ぶだけでなく、人と人をつなげていく。そしてオモイデツアーはアーカイブを活かし、被災した地域の人の記憶をよみがえらせ活気づけるとともに、訪れる人たちとかつての体験を共有させ、より強いつながりをつくっている。



日本一低い山「日和山」（蒲生）登山を楽しむ参加者（2017年7月1日）

#### DATA

### 3.11 オモイデアーカイブ ※

TEL 022-295-9568  
URL <http://sendai-city.net/omoide/>  
Facebook <https://www.facebook.com/sendai3.11omoide/>

※ 2009年設立の「NPO法人20世紀アーカイブ仙台」の活動で東日本大震災を後世に残すための資料の収集・保存・活用を実施。2016年に震災アーカイブ部門を独立させ、「3.11 オモイデアーカイブ」と名称を改めて活動中。



11月に熊本城で語り部をした武山ひかるさん(左)と小山綾さん

# 子どもの視点から体験を話す、10代の語り部たち

© TSUNAGU Teenager Tourguide (宮城県東松島市)

## ポイント

- 高校生・大学生が、自らの被災体験をとおして日常のたいせつさや教訓を伝える
- 50年後も実体験を語れる存在に

——テスト中に地響きがして、机の下に潜りこんだけれど、机ごと体を吹っ飛ばされて。教頭先生のアナウンスも途中で切れた。地震のあとは訓練どおり、校庭で家族への引き渡しがあつて。私は迎えに来てくれた母親たちと自宅へ戻ったあと、6キロほど内陸の高台まで避難しました。津波の情報がないなか、午後5時か6時に、寒いから一旦自宅へ戻ろうと車で半分ほど走ったところで、津波の浸水に突っ込んで。車はそのなかを押し切って進み、なんとか抜け出した——TSUNAGU Teenager Tourguide (以下、TTT)のメンバー、武山ひかるさん(石巻市立桜坂高等学校2年)は、当時東松島市立大曲小学校4年ときの被災体験を、しっかりと口調で語る。

自宅は津波で全壊。所在がわからなくなっていた父親とは、1週間後に電話が通じ、避難所で再会できた。4月中旬から、津波で被災した校舎の2、3階の教室で授業が再開。乾いたがれきの粉塵が舞うなかを歩いて通った。学校に行くようになって、友人が亡くなったことを知った。給食はパンと牛乳だけ。「だんだんおかず付きになつて、週2回はお弁当が出るようになった。でも、ご飯が酢飯で酸っぱくて、魚もしょっぱい。保存が効くようになってあつたのかな」。中学2年のときに、先輩が語り部をしていることを知って、興味をもった。語り部の経験があつた同級生の高橋さつきさん(宮城県水産高等学校2年)に誘われたことをきっかけに、昨夏から自分の被災体験を人前で話すようになった。

大曲地区での現地ガイドを皮切りに、東京・北海道でも話をした。聞き手は大人ばかり。県外で話すと、会場のリアクションが大きい。質問も飛んでくる。「大曲を知らない人ばかりだから、どうすれば伝えられるかを考える」。語り部を続けるのは、「自分と同じ思いをしてほしくない。防災意識をもつてほしい」から。高橋さんも「自分にしか話せないことがある」と話す。「大人が語り部をする、なんでも美談にする。子どもを押しつけて、支援物資をとっていった大人もいた。うちらは事実を見たとおりに話す」。

## 10歳代の語り部

TTTは、10歳代の語り部グループだ。当時東松島市立

野蒜<sup>のびる</sup>小学校6年生だった6人が、震災の記憶を語り継ぐことを目的に、2015年春から活動を開始。ツアー客やボランティア向けの現地ガイドを中心に、県外での講演にも応じる。新たに武山さんなどが加わる一方、進学のために休止するメンバーもおり、現在は野蒜チームと大曲チームに分かれ、高校2年生と大学1年生の6人が活動。2人組で話をするというルール以外は、内容も個人に任せられ、自由度が高い。協力してくれる大人もいるが、あくまでもメンバーの自主性がT T Tの強みだ。

立ち上げメンバーの一人、小山綾<sup>りょう</sup>さん（東北福祉大学1年）は、小中学校時代から仲の良い友人に声をかけられて始めた。ペアを組んではじめて語り部をしたとき、その友人の被災体験をはじめて詳しく聞いた。号泣した。自分の体験も泣きながら話した。「私は、被害の大きかった野蒜小学校の体育館ではなく、校舎に避難していた。家族も亡くしていない。家は地震被害のみで浸水しなかった。被災

レベルが低いと思っていたから、最初は話すのがいやだった」。でもペアで何回か話すうち、校舎内のことを話せるのは、自分だけだと気づいた。3階の図書室で、避難してきた子どもたちに絵本を読み聞かせ、手遊びをして過ごしたこと——それからは前向きに考えられるようになった。県外の講演時には、友人から新幹線のチケットの買い方を学ぶなど、自分でできることが増えていった。

小山さんは、話せば話すほど、伝えたいことがぼろぼろ出てくると言う。昔にぎわっていた野蒜と、いまの野蒜のこと。災害に備えて日ごろから知識を蓄えてほしいこと。「話すことで、私の体験が多くの人に伝わる。自分の記憶を風化させないためにもなる」。小山さんは将来、幼児向け防災教育に携わりたいと話す。

T T Tメンバーの飾りのない言葉は、「日常」のたいせつさを浮き彫りにする。50年後も現役で語り部ができる可能性を秘めているメンバーたちが、宮城の人財であることは間違いない。小

阪神・淡路大震災記念 人と防災未来センター 主任研究員

### 菅野 拓 (すがの・たく)さん

2014年大阪市立大学大学院文学研究科後期博士課程単位取得退学。博士(文学)。専門は人文地理学、NPO/NGO論、被災者生活再建支援。2011年より一般社団法人パーソナルサポートセンターにて事務局長、企画調査室長などを務め、東日本大震災発災直後から仙台市との協働事業を立ちあげ、被災者の生活再建支援事業を運営し、現在は理事。2014年より人と防災未来センターに所属し、主として東日本大震災復興にかかわるNPO/NGO、被災者支援施策、復興政策などを研究。



## 専門家に聞く地域づくりのヒント

### 対話がつながりを紡ぎ出す

人間は共同体的な動物であると古代から認識されていた。さまざまな人とのまじわり合いのなかでともに暮らしをつくっていくことが人間の本性だ、ということなのだと思う。ただし、人はみんな異なる。年齢、性別、姿形、考えかた。生物学的に異なることもたくさんあるし、生きてきた環境や積み重ねた時間が違いを生むこともある。人は本質的に異質なものだからこそ、さまざまな人々とのまじわり合いには、必然、なんらかのコミュニケーションが必要になる。しかし、時間や距離の障壁、もっている知識の違いなどから、コミュニケーションは必ずしも滑らかな行われず、対立や無関心を生むこともある。対立や無関心を超えて人と人がつながること、ここにメディアというもの存在理由があるように思う。

紹介された3つの取り組みはいずれも災害をきっかけに自発的に生まれたり、育まれたりしてきたメディアである。メディアとはなんらかの情報を伝える媒介のことだ。メディアという言葉は必ずしも紙や画面で、いま存在する誰かに情報を伝えることだけを意味するのではない。人と人とのコミュニケーションのもっと広い側面にかかわるものだ。「石巻復興きずな新聞舎」は直接に人が人に会いに行き新聞を手渡し、「3.11 オモイデッサー」では過去にふれることで人と人との直接的な交流が生ま

れ、「TSUNAGU Teenager Tourguide」は過去の事実やいまの思いを赤裸々に生々しく伝える。3つのメディアは、思いどおりに生きることがままならない人、たいせつなものを無くしてしまった人、そのような状況でも新しい暮らしを見据える人の感情や意思を、生身をとおして伝えている。さまざまな人の感情や意思が生身をとおして伝わるからこそ、読み手・聴き手は安心し、励まされ、勇気づけられ、明日への智恵を感じ取るのだと思う。

さらに、3つのメディアは一方通行の情報伝達ではなく、双方向に情報がやり取りされる対話を生み出している。対話の相手は、現在ともに時間を過ごしている人、過去にともに時間を過ごした人、まだ見ぬ未来にともに時間を過ごすだろう人とさまざまだ。人は、そのような対話を積み重ねるなかで、人と人とのつながりを発見し、たいせつにし、自分の一部にして、自らの人生を形づくっていく。

大きな災害を機に生まれ、育まれたこの3つのメディアは、人間の本性に訴えかけたいせつな取り組みである。なぜなら、人が過去や現在にふれ、未来に思いをはせることで、人と人が対話することを媒介し、つながりを紡ぎ出すことに一役買っているからだ。そのつながりの糸は、将来の新しい暮らしを織りあげ、ともに暮らす地域を育んでいくに違いない。



老若男女が集まって、一緒に食事をつくること。

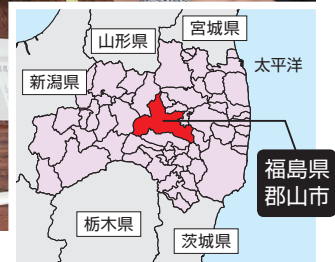
食べて、しゃべって、笑い合う。地域のきずなをつくること。

楽しい時間をとにもにする、困ったときは支え合う。住みよい地域をつくること。

みんなで作って一緒に食べよう！



地区集会所に集まった手づくり食品研究会の会員



DATA

駒板地区

福島県郡山市東部の中山間地に位置する農村集落。450年ほど前の古文書にその地名が記されるほど古い歴史を持つ。葉たばこ、水稲、野菜、果物などを組み合わせた複合経営の兼業農家が多い。およそ40世帯100人ほどが暮らす。高齢化率は約43%。



ジャムを煮込むあいだも和気あいあい



「収穫作業、お疲れさま！」



たわわに実ったブルーベリーを収穫

福島県郡山市の東部にある中田町駒板地区は、40世帯ほどが暮らす山あいの農村集落。

この地区で長年、専業農家として水稲や野菜、果物などを栽培する七海勇吉さん（67歳）は、「食」を通じた交流創出と健康増進を目的に「手づくり食品研究会」を主宰している。

会員は30～80歳代の住民14人。年に6～8回程度、地区集会所に食材を持ち寄り、郷土料理のほか菓子などをつくって一緒に食べる。

警察・消防署員や保健師、管理栄養士らを招き、交通安全や防犯、防火防災、健康、食生活などについての講習会を開くことも。

「研究会は、料理はもちろん、農作業やいろんな生活情報、暮らしの知恵を交換する場でもある。会員同士のおしゃべりも活動のうち。体を動かし、頭を使い、人と会話するから、心も体も元気になる。若い会員には学びの場になるし、高齢の人にとっては介護予防になっている」と七海さん。

毎年夏には、七海さんの果樹園に会員が集まり、ブルーベリーを収穫する。摘み取った果実は、集会所でのジャムづくりに使う。農閑期の冬は、温泉旅館での親睦会も開く。

研究会の活動で、住民同士のつながりを強め、いざというとき支え合える関係を育む。

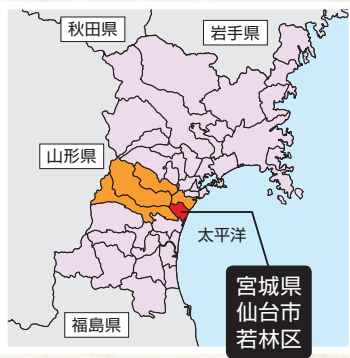


# まじわる！ 集団移転 & 災害公営住宅

第28回

## 安全で安心して暮らせる地域づくり

仙台市若林西市営住宅  
(仙台市若林区)



この日は文化祭。手づくり料理を味わいながら、参加者同士笑顔の輪が広がる

仙台市若林区にある若林西市営住宅は、2014年4月から住民の入居が始まった。同年7月の行政による自治会に関する説明会を経て、住民同士で話し合い、同10月に住宅独自の町内会「若林西せせらぎ会」が発足した。

当時の副会長で、現会長の大場留理子さんは、「さまざまな地域から人が集まっただけで、住む方々がどういった方なのかわからなかった。気軽に役員の就任を頼むわけにいかず、引張るのにもどういった形がいかなかった」と話す。そこで、敷地内で顔を合わせたいところから始め、運営に携わる役員間のコミュニケーションを図ろうというねらいもあって、

「一つ屋根の下に住んでいるが、なかなか顔見知りになることも少ない。こういう機会での交流の輪を広げて親近感をもつようになれば」と話す。役員も、「つらさを少しでも忘れて、生きる楽しさを感じてもらえたら」と考え、「和気あいあいと楽しく」活動している。



出展された手づくりの作品をきっかけに交流が生まれている

現在、毎週水曜日には「せせらぎサロン」というお茶飲みを聞き、いろいろな話をしたり、手芸をしたり、歌を歌ったりして楽しんでいる。そこから麻雀や絵画、グラウンドゴルフの愛好会が派生し、周辺地域の住民とも一緒に楽しんでいる。副会長の大友兌夫さん

一方で、しだいに行事やサロンに集まる人が固定化して課題となった。「そういう場に顔を出す人だけが町内会の人ではない。人が集まるところは遠慮したい人もいる」(大場さん)。そういう視点から、ふだん集まりに参加していない人にも、行事のときには声をかけて興味でつくった作品を出展してもらっている。

こういふ素敵なものを家でつくって楽しんでいる人もいることを忘れないようにというメッセージになる。作品を見て、「自分もつくりたい」「こんなことができると知ると知るよさもある。出展を機に行事に顔を出してくれる人もいて、「素敵な盆栽ですね」ありがたい。よろこんでもらえてうれしい。こちらもつくりたいがあります」と交流が生まれている。

### DATA

#### 仙台市若林西市営住宅

〒984-0826 宮城県仙台市若林区  
若林2丁目7  
RC造7階建て2棟、5階建て1棟  
152戸。152世帯入居



52回目 市民リレー

# 東北の元気



東北の力をつくりだす人・団体を紹介します。

## 住民の交流と新たなまちづくりをあと押し



◎一般社団法人 復興みなさん会 (宮城県南三陸町)

DATA

一般社団法人  
復興みなさん会

〒986-0751

宮城県南三陸町志津川字上の山26

上山八幡宮社務所内

URL [http://tohokuconso.org/  
common/minasan/index.html](http://tohokuconso.org/common/minasan/index.html)

E-Mail [minasan.msrk@gmail.com](mailto:minasan.msrk@gmail.com)



災害公営住宅などから買ひものや花見へ、和気あいのバスツアー

地域の様子を紹介するマップも大好評

災害公営住宅にて、七夕飾りなどの催しで交流促進

宮城県南三陸町で、復興のまちづくりに取り組んでいる団体がある。「一般社団法人復興みなさん会」だ。

もともと同会は、宮城大学が、2011年8月～14年3月に、コミュニティづくり等の支援を行う復興まちづくり推進員として、地元住民4人を県の事業で緊急雇用したことからは始まる。そのメンバーで、11年10月に任意団体を設立。14年5月に法人化。

当初の4人を含む7人の会員で、被災した当事者の目をもち、かつ一歩引いた視点で、地域のためにすべきことを模索し、時期や状況に合わせた活動に力を注いだ。

当初は仮設住宅内を1軒1軒まわり、どの集落から誰がどこに入居しているかを整理。マップにして配付した。さらに、団地ごとにお茶会や花壇の植栽などを行い、入居者間のつながりづくりを支援した。

新たなまちづくりに向け、「復興てらこ屋」という、町民・行政間や町民同士の意見交換の場を設けた。より多くの住民が、防潮堤などの復興計画に関する正しい情報を共有したり、行政に住民の声や熱意を伝えることができた。ただ、

の男性。女性や子どもも集まりやすいよう、椿の植樹や花見なども企画し、そこで情報提供やワークショップも行い、地域づくりの担い手増加に努めた。

災害公営住宅入居予定者向けに行政が開いた「くらしの懇談会」には、参加者の話しやすい雰囲気をつくるため同会も参加。そこで見えたニーズをもとに、団地周辺の店や施設などのマップも作成した。

防災集団移転地でも、計画段階から、入居予定者に区割りやまちなみなどについて意見を交わしてもらい、住民主体のまちづくりをあと押しした。

ほかにも、歌津地域の復興状況をまとめたマップの作成や、災害公営住宅でのお茶会といった交流の場づくり、自治会設立・運営のサポート、移動が困難な人に向けては、バスを貸し切つてのまちめぐりなどを実施してきた。同会が14年から毎月発行してきた「南三陸復興まちづくり通信」では、主催企画のことや町内の出来ごと、復興状況などを紹介している。事務局の高田篤さんは、「新しいコミュニティの活性化のため、町と住民や、住民同士をつなぐことが役目」と語る。



# どろいでもサロン

第5回

自然なつながりと支え合いを生み出す



## 人生いろいろ会話も弾む おねえさんクラブ

福島県猪苗代町

福島県猪苗代町では、お互いの家を行き来して「お茶飲み」をする生活文化が、高齢世代の女性を中心に比較的よく保たれている。

歩いて行ける範囲で集まるのが普通のお茶飲みのパターンだが、広い町のあちこちから車を使って集う人たちもいる。

「道の駅猪苗代」からほど近い、廻谷地区の鈴木アイさん（81歳）宅に11月16日、鈴木さんを含め6人のお茶飲み仲間が集合した。69歳から85歳までの女性たちで、住んでいる地区は全員違う。歩いて行ける距離ではないため、お茶飲みのときは、どこに集まるにしても車を運転できる人が移動手段のない人たちを乗せて来る。

「住んでいる地区はばらばら、送ってきた人生もいろいろ。だからこそ会話が面白いのよ」と鈴木さん。電話やスマホ、さらにはラインも駆使して、しきりに連絡を取り合う。「一緒に温泉や外食に出かけるのもしょっちゅう」（鈴木さん）。少なくとも週3回くらいは、3〜6人ほどでお茶飲みなど

をする。体調の悪い人がいれば、誰かがすぐに気づく。家を訪ねて様子を見、食事を差し入れることも。

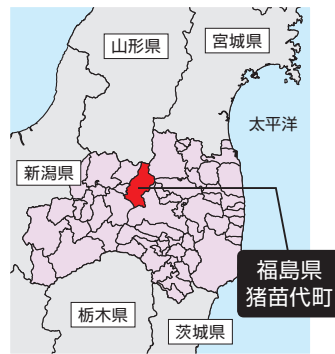
仲間の一人、涌井スミエさん（73歳）は、「みんな夫を亡くしてます。ひとり暮らしだったり、家族がいても日中は家に一人きりだったり。だから、お茶飲み仲間がいるのは本当にありがたい」と話す。

車の運転ができる人は、仲間の買いものや通院を手伝っている。

別々の地区に住んでいながら、なぜこんなつながりが生まれたのか。

実は、6人のうち5人は、同じグラウンド・ゴルフクラブの会員。冬季を除く月・水の週3回、練習会や競技会に参加する。

「プレーしたあと、『お茶でも飲みに行かない?』と誘ったり、誘われたりしているうち、親しくなりました」（涌井さん）  
こうしてできた仲間の集まりを、彼女たちは「おねえさんクラブ」と呼んでいる。たとえ高齢になっても、夫を亡くしても、支え合いながら若々



しく生きていこうという決意が、その呼び名に込められている。**木**



## 歩いてしゃべって支え合い 東山歩こう会

福島県川内村東山地区

朝7時半。

集会所に70〜80歳代の女性たち5人前後が集まる。「さあ行くよー」のかけ声。一斉に歩き出す。福島県川内村東山地区で、早朝ウォーキングをする「東山歩こう会」の人たちだ。

集落の生活道路を抜ける。交差点で方向を変え、田畑のなかをまっすぐ伸びる幅の広い道路に入る。遠く広がる農地、肩を寄せ合うように建つ家々、周囲を囲む深緑色の山並み…穏やかな風景が続く。

朝の道々に、女性たちのおしゃべりと笑い声が明るく響く。いくつ目かの交差点で再び方向を変え、集落へと向かう道筋をたどる。集会所に着いて終了。3キロほどの道のりを40〜50分で歩ききる。よほどの荒天でなければ、雨でも歩く。

「もう30年以上歩いていきます。避難先でも歩き続けたんですよ」こう話すのは、久保田ノブ子さん（83歳）。

村は、福島第一原発事故に伴い全村避難。その後、避難指示区域の見直しなどがあり、2012年1月には帰村宣言が出された。久保田さんは避難先

の郡山市のアパートを引き払い、自宅に戻った。仲間たちも次々と帰ってきた。今年9月1日時点では、村の人口2713人の約8割に当たる2196人が村内に生活拠点を戻している。「みんなで歩くときのおしゃべりが楽しい。おしゃべりしたくて歩いているようなものです」ウォーキングをしながら、その日の外出先や翌日の予定などを仲間伝える。

「家族がいても日中は一人きり。『どこ行つたんだ、大丈夫か』なんて周囲に心配をかけないよう、前もって話しておきます」仲間が何の連絡もなくウォーキングに姿を見せないと、家に立ち寄って声をかけたり、電話で様子を確かめたり。そうやってお互いを見守り合う。

歩いたあとは、一休みして畑に出たり、仲間と家でお茶飲みしたり。ゲートボールやグラウンド・ゴルフに参加する人もいる。土曜日の午前9〜11時には、集会所でサロンが開かれる。サロンでのレクリエーションやお茶飲みも、楽しみにしている。

一日の計は朝にあり。



まず歩くことで、健康と支え合いをつくる。木

## 遠慮と支援、そして、思いやり

社会福祉法人広島市安佐南区社会福祉協議会 主任 石田浩巳

2014年8月20日未明の土砂災害を受け、安佐北区災害ボランティアセンターが同年8月22日に立ち上がり、総務班やマツチング班、ニーズ班などに生活支援チーム（以下、チーム）が加えられました。立ち上げ時は、現役看護師や看護師OBの皆さんを中心に、大阪のNPO法人み・らいずの応援をいただき、8月27日から訪問活動がスタートしました。

## 全戸訪問して関係者と共有

とにかく時間はかかっても被災地域の全戸訪問を実施しようとは始めました。コピーした地図を片手に、二人一組で二軒二軒歩きます。活動時間は9時から概ね15時

まで行い、センターに戻ってきた後は、訪問した状況を共有しました。

この情報共有の会には、当日訪問活動を行ったボランティアのほか、行政の保健師や地域包括支援センターが参加。ともに共有できたことで、気がかりな人の報告があると、「Aさんについては地域包括支援センターで把握しています」「保健師としてかわりがあります」「制度やサービスを検討しよう」など、役割分担や専門機関につなぐなどの共有が図れました。

## 訪問して気づいたこと

地域の訪問をしてわかったことは、家のなかに土砂が入っていても「ほとんど

寝ていない町内会長さんを自分のことで困らせることはできない」と心配をかけたくないという人がいたり、たまたま訪問した先で障害のある子どもがいる世帯では、「障害のことは絶対にな所では言わないで」という母親の言葉を耳にすることがありました。「この近所に障害の人なんかおるわけない」という声も。

訪問時「何か困ったことはありますか」という言葉は、ほぼ使いませんでした。看護師は、食事や睡眠、健康のことや血圧の測定、カープの話題などをひとつのきっかけに、自然な日常会話を心がけていました。

短い時間でも、昔から知っているような感じで接します。「実は薬をもらいに行

かんといけんのだけど、ボランティアさんが土砂出しに来てくれるから、待つとるんよ」と、自分の体調より家を守ることを優先される人にも出会いました。

支援を遠慮される方、先祖代々の土地を守らなければいけない思い、障害に対する偏見など、訪問することで知ることができました。支援をしているというよりは、相手の言葉に耳を傾けることが重要でした。自分自身のこととして考えることができるかと、一方的な支援で終わって、次につながっていないかたもありません。

次号では、そのような状況から何が必要か、何をしなければいけないか、復興期に向けて取り組んだことを紹介します。

## 石田 浩巳 (いしだ・ひろみ)

1972年山口県生まれ。小学生2年生のときに父親の転勤で広島に引っ越す。1994年6月より財団法人広島勤労者職業福祉センター（広島サンプラザ）で勤務、スポーツ関係、文化関係等多方面の方々と関係を築く。2004年に広島市社会福祉協議会に転籍。西区や安佐北区社会福祉協議会等を経て、2017年4月より現職。



# 宮城県サポートセンター支援事務所からのお知らせ



## サポートセンター行脚

宮城県サポートセンター支援事務所 所長 鈴木守幸

### 「困ったら、家族？」

家族機能が弱まったという指摘がなされて久しい。いくら「介護の社会化」といっても、老老介護、介護離職などもあり、家族の負担は極めて大きい。親不孝者の私も、家族に大きな負担を強いてしまった。

親の介護に向き合うことは家族であれば当然と思うのは、今や幻想に過ぎないといったら言い過ぎか？皆さんは、親をたいせつにしたいと思っているし、できることなら親の想いに添いたいと思っている。

被災地で、自宅再建し2世代、3世代同居を夢見てきた高齢者たちが、息子の仕事が被災地では得られないことや、孫の進路を考えたときに、結果自宅再建を断念せざるを得ない現実を数多く見てきた。少子高齢化、核家族化は日本社会の共通の課題だ。

最近寄せられる相談内容で顕著なのが、独居の高齢者の将来にかかる不安からの相談だ。『ボケたら』『介護が必要になったら』などの尽きない不安。お金があれば大丈夫と思っていたが、自己管理ができなくなったときに誰に頼ればよいのか。家族がいないので不安でしようがない。

大丈夫。お金があれば誰に委任していくかは見つけやすい。要は誰に相談しながら、ともに考えてくれる人を得ながら、決めていくかが重要だ。なにせお金持ちは「猜疑心」が強いようで、信頼できる人を見つるのが下手のよう（金持ちでなくて、よかった!）。

家族に過度に期待しないとする場合や独居の場合、これからたいせつなのは地域社会の支え合いに期待すること。けれど、支え合いは本人に意思に寄り添うことが基本。本人の意思形成に協力し、表明する機会に代弁や補完的な役割を担い、意思の実現に寄り添う。介護や財産管理を担うことではない。制度やサービス利用に本人の意思を投影する「意思決定支援」の役割を、当事者性をもって参画していくこと。制度やサービスの穴埋めではない。

なので、市町村行政や専門職は、互助の役割を活かす体制整備を行うことが問われている。

今年最後は、少し真面目に、筆をおく（さて来年は?）。

## ひとりごと

サポーターのあなたへ



宮城県サポートセンター支援事務所  
アドバイザー 浜上 章

### 地域活動における“合意形成”の たいせつさと難しさ

住民参加の地域活動を進めたり、支援する際に最もたいせつなことの一つは、集まった人、関係者の“合意形成”をどう図るかだと言える。自治会や地区福祉委員会、任意のグループ等の運営や活動の立ちあげを推進する時、その目的や進め方、基本的な考え方などについての参加者の意見、思いなどをしっかり出し合い、聴いて合意、共有を図ったうえで次に進まないとうまくいかない。自治会組織でも、会長がさまざまな事業を積極的に取り組んでも、ほかの役員や思いを十分に聴かないで、“良いことだから”と一方的に進めていくと、はじめは良いがいつの間にか役員に不満が募り、反発や離脱が起こり組織が分裂することもある。

介護保険制度改正でいま取り組まれている“協議体”設置でも、地域事情や地域住民、組織の意見や思いを聴かないで行政主導が進めると、地域住民、組織から反発がきて協議がまったく前に進まない、という事例もある。小地域でサロンやカフェを立ちあげ、運営していくに際しても熱心な一人のリーダーだけで進めると、仲間の理解や協力が得られなくなる。

地域活動は、いろいろな人の参加のなかで進めていく必要がある。そして、わかりきったことではあるが人の考え、思い、事情は一人ひとり違う。その違いをどう大筋で一つのものにしていくか、そのためには丁寧に時間をかけて話し合う必要がある。

進める側の思いや施策課題の目標が先行しても、あるいは現状に合わない提案をしても参加者、住民はついていけない。地域の立場からすれば「お仕着せ（やらされ感）」が募る。その行きつく先は、目に見えている。

個別支援でたいせつなことは“意思決定”支援であると言われる。一方、地域活動においては“合意形成”（地域の意思決定）支援であると言える。

ただ、住民、関係者の合意形成が図れて活動がスタートしても、時間が経つと人の意識も変化したり、人の交代もあって当初の合意、意識で同じようには進まない。合意形成は、一度やったらそれでよい、というものではない。状況を見ながら再度話し合っ、確認したり、新たな要素を加えながら進めていかなければならない。ここに、地域活動における“合意形成”のたいせつさと難しさがあると、この頃特に思う。

#### 平成 29年度 宮城県被災者支援従事者研修事業

<ステップアップ研修>

【仙台会場②】 1月22日(月) 宮城県本町第3分庁舎

講師：永坂 美晴 (明石市望海在宅介護支援センター センター長)

<講座6 住民主体で進める支え合いの地域づくり②兵庫県宝塚市>

【仙台会場】 1月16日(火) 仙都會館

講師：山本 信也 (兵庫県宝塚市社会福祉協議会 地域福祉部 地区担当支援課 課長)

樽井 勝彦 (中山五月台六丁目支え合いシステム すけっと 代表)

石井 久美子 (中山五月台六丁目支え合いシステム すけっと)

宮城県サポートセンター支援事務所

〒980-0014 宮城県仙台市青葉区本町3-7-4 宮城県社会福祉会館3階 TEL 022-217-1617 FAX 022-217-1601

AAは世界各地・日本全国でそれぞれに開かれていて、アルコール依存症の人たちの自主的な集まりである。同じ経験をした人同士が分かち合える力強さと、回復に向かっていける希望と、明るい雰囲気とに満ちている場所だ。仲間とのつながりのなかで、自責感や辛い体験などから徐々に解放されて、「自ら回復していく」ための力が養われていく。



石巻市で開かれているAAミーティングの一風景

DATA

AA東北セントラルオフィス

住所 宮城県仙台市青葉区柏木  
1-7-12 紫苑荘 2F  
TEL/FAX 022-276-5210  
E-Mail aa.tco20@gmail.com  
URL <http://tco.aatohoku.info/>

AAとは、アルコール依存症者を中心とした自助グループである。グループ単位で定期的な集まりをもち、段階的なプログラムにのっとり回復を目指している。AAは、Alcoholics Anonymous（無名のアルコール依存症者たち）の略だ。名前・住所・連絡先を明かさなくてよいので、安心して自分のことを話せて、個人のあれこれに縛られずにすむ。入会金や会費は

かららず、「アルコールをやめたい」という願いがあれば、誰でも参加できる。集まりには、当事者のみで行われるクロウドミーティングと、当事者を含め誰もが参加できるオープンミーティングがある。そこでは、自由に自分の経験と想いを語ることができる。自分の話したことに對して否定をされることはない。集まりの内容はグループごとに少しずつ変わる。宮城県石巻市のとあるグループは、毎回テキストの読み合わせを行い、本の内容に沿って体験を語り合っている。この日は、飲酒が原因でおきたことや依存が始まった理由の振り返りが行われていた。そのなかで、「生きる価値がないという自責感から、お酒に走ってしまった」「ありのままを受け入れられず、人と自分を比べてしまうことが依存症の素地になった」と背後にある感情についても探っていく。そうしたプログラムを重ねるうち、「うまくいかない自分も謙虚に受け入れられるようになってきた」「思い込みを捨てられた」と、効果を実感する声が聞かれる。

☆次号予告 特集「新しい故郷をつくる」

平成29年度 宮城県地域福祉コーディネーター研修事業

<講座8 地域の支え合いの発見と活性のための体験型講座  
宝物の発表会の準備・開催と講座のまとめ>

【大和町会場】 1月12日(金) まほろばホール  
講師：高橋 誠一(東北福祉大学 総合マネジメント学部 教授)  
酒井 保(ご近所福祉クリエーター)  
池田 昌弘(全国コミュニティライフサポートセンター 理事長)

<スーパーバイザー研修>

【仙台会場①】 12月20日(水) 宮城県自治会館  
講師：大坂 純(東北子ども福祉専門学院 副学院長)  
佐藤 幸子(特定非営利活動法人 自閉症ピアリンクセンターここねっと 理事長)

平成29年度 宮城県生活支援コーディネーター養成研修

<特別研修 生活支援コーディネーターの上長の役割と実際>

【仙台会場】 1月18日(木) 宮城県本町第3分庁舎  
講師：大坂 純(東北子ども福祉専門学院 副学院長)  
高橋 誠一(東北福祉大学 総合マネジメント学部 教授)  
志水 田鶴子(仙台白百合女子大学 人間学部 准教授)  
吉田 瑞穂(大分県中津市社会福祉協議会 地域福祉課 課長)

読者の声

月刊「地域支え合い情報」は、コミュニティ(地域づくり)から震災・復興を考え、提案していくために生まれた情報紙です。ぜひ忌憚のないご意見・ご感想をFAXまたはメールにて編集部までお聞かせください。

62号の宮城野げんきクラブのご紹介を拝見しました。月に1回楽しく体操をされているとのこと。「無理なく続けられる」工夫が長続きのコツのようですね。これからの寒い時期、つい家にこもりがちですので、私も見習って前向きに健康づくりをしたいと思います。(宮城県富谷市A・S)

あなたの活動・地域の活動情報をお寄せください!  
TEL 022-727-8730 FAX 022-727-8737  
E-mail [joho@clc-japan.com](mailto:joho@clc-japan.com)

【おわびと訂正】

本紙 63号3ページに掲載した「特定非営利活動法人ホームひなたぼっこ」(宮城県岩沼市)の記事中に誤りがありました。記事中「ひなたぼっこハーモニー」の説明が「放課後等デイサービス・児童発達支」となっていたようですが、正しくは「放課後等デイサービス・児童発達支援事業所」です。お詫びして訂正いたします。